

問一 1 衝撃 2 越境 3 矛盾 4 吐露

問二 大切な存在が死んだとき、現世の延長に死後の世界を置くことで死者をそこに包含させ、死後の存在を信じて心の慰めを得る仕方。（59字）

問三 死者への想いは生前以上に過剰にあふれ出ているのに、その想いが帰属するはずの対象は完全に失われていることの違い。（57字）

問四 亡くなった人は自分と別個の人格をもつ他者であり、本来自分の想像の枠内にとどまらない存在であるが、死後は自分に想像可能な範囲内に常に収まってしまおうということ。（78字）

問五 自己の存在や生活の前提が失われ、その回復のため死者への想いを解消しようとする試みと、心中で死者を存在させようとする試みがなされる。前者は死者が心中から消えることへの痛みが伴い、後者は逆に不在を痛切に意識させるため残された人は翻弄され続ける。（120字）

問一 効用を最大化しよう人が行動すると前提におくことで、事態を客観的・数学的に捉え、一つの基準にもとづいて判断ができるから。（60字）

（別解） 自分の効用を最大化させる選択肢を人が選ぶという前提に立つことが、学者として自分が得る効用を最大化させる選択肢だから。（58字）

問二 十分な理由によって支えられた選択肢が複数ある（22字）

問三 自らの行動をする選択理由とその行動によって得られる効用が偶然一致したということ。（38字）

問四 人の選択は同一の基準で比較衡量できない多様なものだが、その選択の全てが合理的理由に支えられている。（49字）

問五 科学的合理性の前提に立つと、学者本人も個人の効用のために学問を行うことになるため、真理の追究以上に効用を得られる事情があれば真理を捻じ曲げる可能性が出るから。（79字）

三

問一 イ 気づかされる

二 もしかすると

ホ 我を忘れた状態で

問二 承久の乱により、生き延びたいと願いつつ処刑されようとする宗行の無念さを、現世を厭う立場の筆者が生き長らえて見ること。（58字）

問三 遺骨を抱いて都に戻る従者により光親の処刑を知った宗行が、自らも同じ運命にあることを悟ったはずだから。（50字）

問四 今日まで命の終わりを知らずに安穩に生きてきたが、この浮嶋が原で自分の憂き運命を聞き知らされることとなってしまった。

四

問一

- a || おいて
- b || ばかり
- c || もつぱら
- d || しきりに
- e || うたた

問二

はじめに見た時と同じように、仕掛けに二尺ほどの材木が入って破れ、蟹がみな逃げてしまった状態。

問三

わたしを解放してくれないうえに、姓名を教えてもくれない、これ以上何を企てるべきだろうか、いや企てようがない。

問四

王の姓名を何度も尋ねる言動に、人間の姓名がわかれば攻撃できるという自身の能力を使って、自分を解放してくれない王を攻撃して逃げようという意図があった。（七四字）